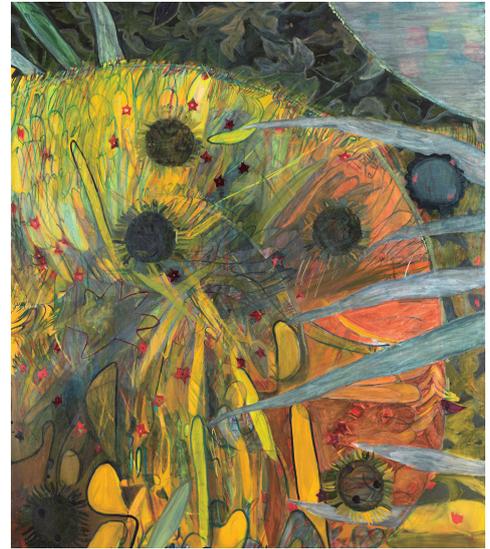


増田佳江 「Daisy」

2020.04.05(sun) — 06.07(sun)



「向日葵、纏紅草、野葡萄」2020, 162cmx130.3cm, oil on canvas

この度、rin art association では初の個展となる、増田佳江「Daisy」を開催いたします。
増田は日々自庭の植物を注意深く、また彼女の独特の視点から観察し作品を制作しております。本展では自身の体感を元に制作された作品を含む新作を中心に展示しております。2年ぶりとなる個展をこの機会に、是非ご高覧ください。

statement (一部抜粋)

私が住み始める前からこの庭の隅っこに流れ仏のような木彫りの魚が落ちていた。
なんとなく家の中に入れてくたなかったので雨ざらしのまま、庭の隅に置いていた。

例えば、この魚の視線を借りて窓越しに家の中をみると、そこに暮らす家族や自分が、知らない住人のように見えてきて、あたりまえの暮らしから解放される瞬間がある。

2018年の秋に巨大な台風が来た時は、ガラス窓一枚に守られた家の中で荒れ狂う庭を見ていると、まるで自分が無力な水槽の魚にも見えてきた。
内からみた外、外からみた内、距離感、視点の切り替えによるものの見方について、視線を遊ばせるように手を動かして探ろうとした。

「パリンブセスト / 増田佳江の絵画」

増田佳江さんは、絵画制作において「筆致の自由な部分と制御する部分を拮抗させて、丸くおさまらないように」しているという。しかし彼女の絵画には筆致以外にも、対抗する二つの要素が同時にとりこまれている。近景と遠景。それに時間軸を含めれば、近い記憶と遠い記憶。また心の作用を含めれば、強い印象と弱い印象。彼女がアメリカ・ミシガン滞在中に訪れたデトロイトの廃墟ビルの窓に落書きされたハート形と、今住んでいる京都・東山の家の庭にはびこるドクダミの葉は、作品“デトロイトのハートまたは庭のドクダミ”で重複しながら、それぞれの姿を現している。また、アメリカの美術批評家ジョン・ヤウは、1960年代からいわれている「絵画の死」と1980年代以降の「絵画の復権」— 現代絵画史上重要なふたつの転換点 — の意味をふまえながら、行き交う作品を制作する作家に注目しているが、増田さんの絵画にもこの相反する視点がとりこまれているように思う。

増田さんの絵画の題材となるのは、彼女が実際に見て、知覚する風景である。2015年以来、自宅の庭や植物が多く描かれるようになった。しかしその作品世界は、けっしてドメスティックに丸くおさまらない。それは現在の風景の合間に過去が透けるように現れる、パリンブセスト(繰返し文字が消され、書かれてきた羊皮紙)なのである。

ミシガン大学美術館 アジア美術キュレーター 及部奈津

増田佳江 (ますだ かえ)

1978年、京都府生まれ。画家。2004年京都市立芸術大学美術科絵画専攻油画修了。

風景や建築物、植物などを多様な筆致を用いて描く。その絵は具体的なイメージから抽象的なイメージへと変化していくゆらぎがあり、プロセスそのものを透過するように描く。2013年新進芸術家海外研修制度に採択されミシガン州アナーバーに滞在。主な展覧会に「絵画、それを愛と呼ぶことにしよう vol.7 増田佳江」(Gallery αM、2012年)、「遠い歌、近い声」(ギャラリー小柳、2012年)「DOMANI・明日展」(国立新美術館、2018年)がある。

[水-日] 11:00 - 19:00 [月-火] 休廊

contact

rin art association

370-0044 群馬県高崎市岩押町 5-24

t: 0273-87-0195 e: contact@rinartassociation w: <http://rinartassociation.com>